

### 1. 北東部イタリア諸州の地域社会研究と社会的分脈

イタリアの北東部は、1980年代における青年層の失業を地場産業の小企業連合や協同組合の形成による克服を試みてきた地域である。同地域の経験はいわゆる「サードイタリア」論というかたちで近年紹介されているが、そこで論じられている諸地域はそれぞれの固有性を有している。少なくとも「サードイタリア」論の対象地の中において、エミリアーロマーニャ州とヴェネト州とは分けて論じられるべきである。「サードイタリア」論の根拠とされているパニャスコの『三つのイタリア』において、またその後の著作においては、「サードイタリア」(Terza Italia)は彼自身の言葉としては使用されておらず、あくまで「中部・北東部イタリア」と表記される。彼が「三つのイタリア」を析出するに至ったのは、「進んだ北部一遅れた南部」という図式でみられてきたイタリア南部問題の二元論的な発展モデルを再考し、こうした見方を乗り越えるという意味での「第三」であった。パニャスコの「第三」のイタリア論は、労働市場、社会階層、生産活動の分散化に関する問題提起と調査の結果としてであり、逆に言えば「三つのイタリア」という概念が有効性を発揮するのも、上記の問題設定に限ってである。「三つのイタリア」をそれぞれある実体として固定化するのではなく、一つの解釈モデル(modello interpretativo)としてとらえるべきである。したがって異なる問題意識や分析の視点によっては「三つ」が「四つ」あるいはそれ以上となることも十分有り得る。例えばイタリアの社会学者メルッチが着目している「新しい社会運動」のイタリアにおける主要な舞台でもあったトレントは、この地域に固有の文化的背景を抱えていたと考えてよいであろう。例えばそれは、小さな地方銀行を地元民が守っていくという動きなどに現れている。さらにトレント出身で現在サルディーニャ州サッサリ大学において独自の内発的発展論を展開しているメルレルが研究対象とす

るサルディーニャ州においては、全国規模の生産者協同組合には包摂されない形での独自の地域形成の動きが存在し、「サードイタリア」論とは異なる形での地域社会発展のあり方がもとめられている[以上、田中夏子氏の論文に依拠]。

## 2. 社会システム論を越えて複合社会発展論へ

社会システム論とA.トゥレーヌの新しい社会運動論から多くを吸収しつつも、なぜメルッチは個々人の身体レベルの問題にまでおりていかなければならなかったのか。そこには彼がみていたトレントの現実があるはずだ。かつて、そして今もなおグラムシは「テキスト」としてのみ読まれ、グラムシがイタリア社会の文脈のなかで考えた言葉の背景にある多くの遺産が取りこぼされている。メルッチもまた、イタリア社会とりわけ彼がみていたトレントの文脈で理解されるべきではないか。Melucci in Context。トレントはドイツ語文化圏であるボルツァーノを間近にひかえ、カソリックが文化的なヘゲモニーを持っている「白い」州である。しかしトレントでは、日本でもよく紹介される「赤い」州であるエミリア＝ロマーニャの協同組合と比肩し得るような「白い」協同組合運動が存在している。そしてヴェネト州の協同組合運動もまた、「白い」州における地域形成の運動という側面を持っている。ここではバニャスコがなぜ、インフォーマル経済に見られるような地域の「歴史的根源性」に着目したかという問題を、ヴェネトの文脈で考えるべき。

### Bagnasco in Context.

ここでの話を少し遠景から考えてみよう。イタリア社会の知的風土を考えた場合、無視できないのは、イタリア北東部におけるA.Negliの思想的影響力である。NegliがMarx oltre Marxのなかで、アルチュセールを批判しながら、資本論ではなくGrundrisseに依拠せよと言ったことの意味。また彼がBobbioとの論争の過程で展開したヘーゲル論（とりわけ国家論）の意味。メルッチとは違う形でイタリアの思想史的な伝統を踏まえつつ議論を展開しようとしたのがNegli。しかし彼の議論はヴェネトでは通用しなかったという声が上がっている[この点については小林甫氏の議論に依拠]。

メルッチには産業形成という観点は全く欠落している。Negliは工場労働者に着目することはあるが彼にとっては主要な問題ではない。P.Gurisattiによれば、イタリアにおける協同組合研究の大家Stefano ZANの議論もまたヴェネトの現実には合致していない。Gurisattiは、彼がバニャスコと一緒にいったヴェネト調査を評価している。バニャスコの議論を念頭におきつつ、ヴェネトにおいて生活を形成していく時の骨格となっている文化的、社会的な「根」の中身を知りたい。それは、われわれが追求している内発的発展というテーマのなかで大都市部における産業形成を社会運動としてとらえるという性格を持つ研究テーマである。

話を整理しよう。言いたいのはこういうことだ。メルッチは従来のシステム論の射程を越えて、合理目的性を持った主体に解消されない身体の深層に迫ろうという問題意識を持たざるをえなかった。その背景となった社会的文脈はなにか、それをいかにして把握し得るかという問をたてよう。この視角からNegliとBagnascoの議論を位置づけてみる。

内発的発展とりわけ内発的な地域形成は当該社会における市民社会の成熟度を示すものであり、その内実として、産業形成と生活ネットワークの形成（今日ではこの問題はとりわけ民族共生の問題として現れている）がある。独自の複合社会発展論を展開しつつあるメルレルAlberto Merlerは、一方で彼の出身地であるトレントの協同組合運動をよく理解

しながらサルディーニャにおける内発的発展の可能性を追求している。内発的な地域生活形成という課題は、メルッチ、ネグリ、パニャスコ等の議論を経て、メルレルの議論にまで至ることによって、結果的にはシステム論を乗り越えるという契機を含み込むのである。